

- *ガラテヤ人への手紙は、パウロが第一回伝道旅行で訪れたローマ属州のガラテヤ地方の諸教会にあてた手紙だと考える。パウロが去った後、教会のユダヤ主義者が「異邦人は救われるためには割礼を受けなければならない、律法を守ることが絶対に必要だ」と言って教会の人たちを惑わした。また、「パウロは使徒の資格がない」と言ってパウロの言葉の権威を認めなかった。主にこれらの二つの問題について正すために書いたと思われる。
- *マルチン・ルターが当時のローマカトリック教会に対してヴィッテンブルグ大学の門に「95か条の提題」を掲示したことから、宗教改革が始まった。今年はその時から500年の年になる。教ローマ教会がヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂建設のために贖宥券（信徒がすべき罪の償いを免除し、教会が代わりに行うための切符、免罪符ともいう）を乱発して資金集め始めた出したことに反対したことがきっかけである。ルターは、罪が赦されるのはこんなものを買うとか、なんかよい行いをするとかによるのではない、イエス・キリストを信じる信仰のみによるのだ」ということを主張した。この考えのもとになったのが、ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙である。特にガラテヤ人への手紙を愛した。結局、カトリック教会とたもとを分かち、プロテスタント教会が形成されていく。
- *「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。」（ガラテヤ1：4）いつの時代でもこの世は「悪の世界」である。現代もそうであるが、その世界に住む私たちがその悪から救い出されるということは、神が社会悪、道徳悪をなくしてくれるわけでもなく、また、この世界のどこかの場所に悪が全くない世界があってそこに連れて行ってくれるわけでもない。悪の根源は人が持っている「罪」にある。その罪を赦すために神はイエス・キリストを送り十字架につけた。そして復活されて今も生きておられる。このことはこの世の創造のときから神の計画の中にあつたのである。
- *そのような神の栄光をたたえることは私たちの人生の目的でもある。この世で生きるのは、私自身のためではなく、神の栄光のためである。私のすべてを知っておられる方が、すべてを働かせて益としてくださることを信じて毎日感謝しつつ生きた